

壁新聞に使う白い大きな紙の呼び名は

模造紙72% B紙15% 鳥の子用紙7%

— 全国学校方言事情 —

■ 学校方言とは

「学校方言」 広辞苑にもない言葉だが、最近、ブログの中でも学校方言に関する書き込みをしばしば見かける。

○鹿児島で生まれ育って20年、黒板消しの道具の「ラーフル」が標準語でないことを、大学へ行って初めて知りました。すごいショック。鹿児島の皆さん、県外では「ラーフル」と言っても通じませんよ。気をつけて！

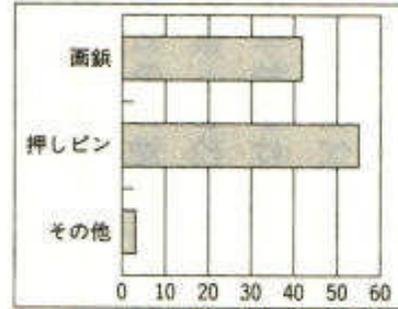
○学校で壁新聞をつくるときに使ったあの白い大きな紙ことを、小学校から高校まで、私はずっと「大洋紙たいようし」と呼んでましたが、最近、それが新潟だけの呼び名だと知りました。でも、どうして新潟だけ？パソコンで模造紙なら変換するのに、どうして「たいようし」は変換しないの？

自分も友だちも先生も学校でみんなが遣い、てつきり共通語だと信じ切っていた言葉が、実はその地域だけの方言だった。学校卒業後、故郷を離れて暮らすようになった人や、他県へ転校した子どもたちが、しばしばこのようなカルチャーショックを体験する。日本の学校では、どこでも同じ教科、同じ内容を学び、同じ行事があり、同じような学校生活を送っている。当然そこでは同じ言葉を遣っているものだと誰もが信じ込んでしまう。ところが、自分の学校ではみんなが遣っているのに、実は他の地方の人には通じない言葉、これが学校方言である。

学校方言には、学校で遣われる用具類に関するものが多い。「ラーフル」のように地域固有の言葉から、「画鋏」と「押しピン」のように全国を2分して遣われている言葉まで多種多様なものがある。画鋏は岐阜県では「画針(がばり)」、定規は静岡県では「せんひき」、山口県では「すじひき」などさらに地域固有の呼び名がある。また、関東地

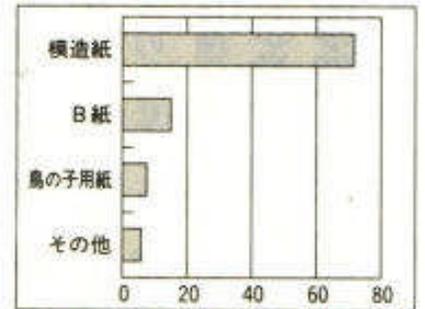
I 学校方言の使用率

①ポスターを貼るピンは



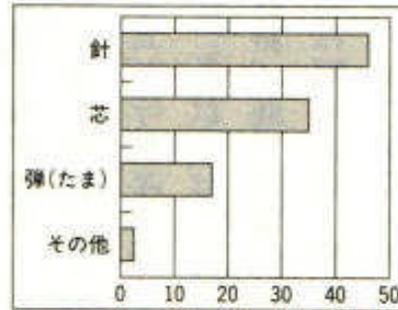
画鋸は東日本に多く、押しピンは西日本に多い。

②白い大きな紙は



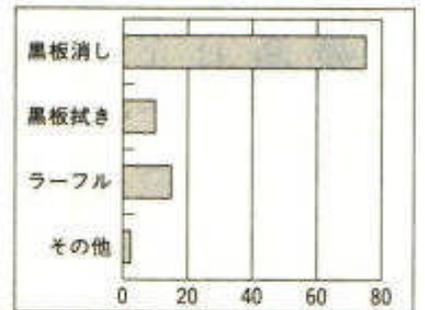
大判紙、広用紙、雁皮、大洋紙など全国にいろいろな呼び方がある。

③ホチキスの替えは



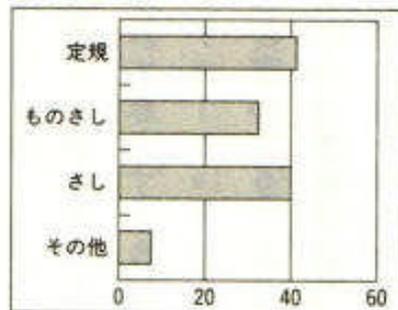
針は東北や日本海側の県に多い。芯は西日本に多い。

④黒板をきれいにするのは



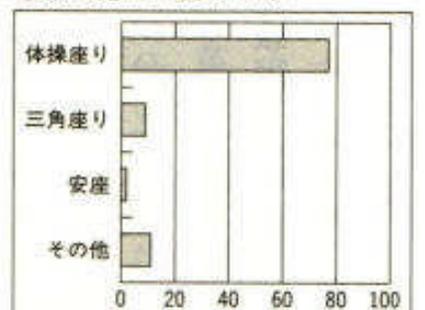
ラーフルは愛媛、宮崎、鹿児島で使われている呼び名である。

⑤長さを測るのは



定規は全国、ものさしは東日本、さしは西日本に多い。

⑥膝を抱えて座るのは



三角座りは近畿、安座は岩手県で使われる。

<HP「全国方言WEBはべりぐ」>

方では体育館シューズのことを「かんばき」といい、体操服は宮城県では「ジャス」、山梨県では「ジャツシ」という。

なお、黒板消し「ラーフル」の語源だが、販売しているメーカーの内田洋行では、商品にラーフルという呼称を使用しており、新品の黒板消しが入った箱にも確かに「ラーフル」と大きく書かれている。オランダ語の「RAFFEL」、こすること、磨くことの意味からきているそうで、鹿児島の方言というより、「ラーフル」が正式名称なのだ。

■ 「模造紙」の呼び名は

そんな数多い学校方言の中でも、もつとも全国各地でさまざまな呼び名があるのは、全国的には「模造紙」と呼ばれるあの白い大きな紙の呼び名である。

新潟県では大洋紙と呼ぶが、富山県では「雁皮(がんび)」、愛知県や岐阜県では「B紙」、香川県や愛媛県では「鳥の子用紙」という変わった呼び名で呼ばれている。ただ、それらの語源が気になって私なりに調べて見たのだが、おもしろいことに由来が一つに

結びついた。次のようである。

「雁皮」というのは昔からの和紙の原料であり、その和紙の一種に「鳥の子紙」と呼ばれる紙がある。その「鳥の子紙」に似せて、つまり模造したから「模造紙」、模造紙にはつやのあるA模造紙と、つや消しのB模造紙があり、略して「B紙」と言った。それが大判の広幅の洋紙だったから、「大判紙」「大洋紙」「広用紙」「広幅用紙」に転化した。

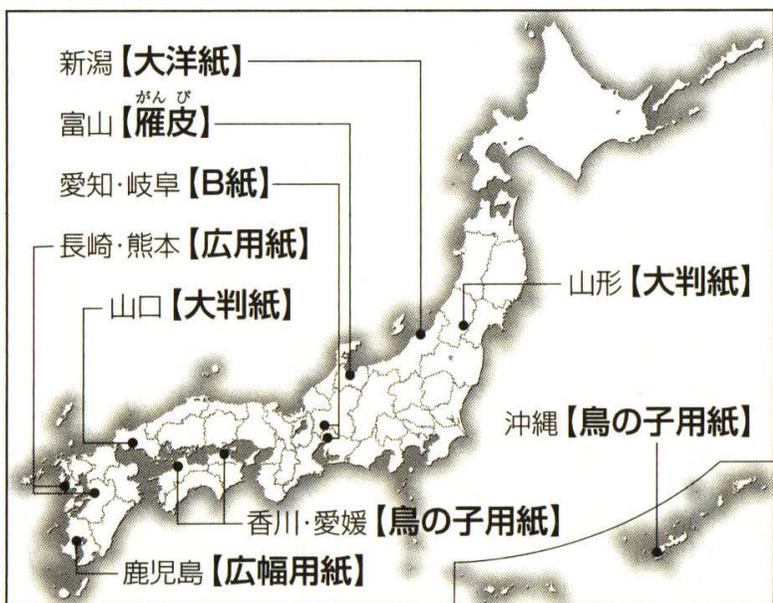
■ 休み時間の呼び名は

用具の名称ばかりではなく、学校生活の中で遣われている言葉の中にも、学校方言は多い。私は、愛知県内の中学校に勤務しているが、授業と授業の間の休み時間を愛知県では「放課」という。昼休みは昼放課という。一般に使われる「放課後」という言葉は愛知県では遣わない。授業後という。

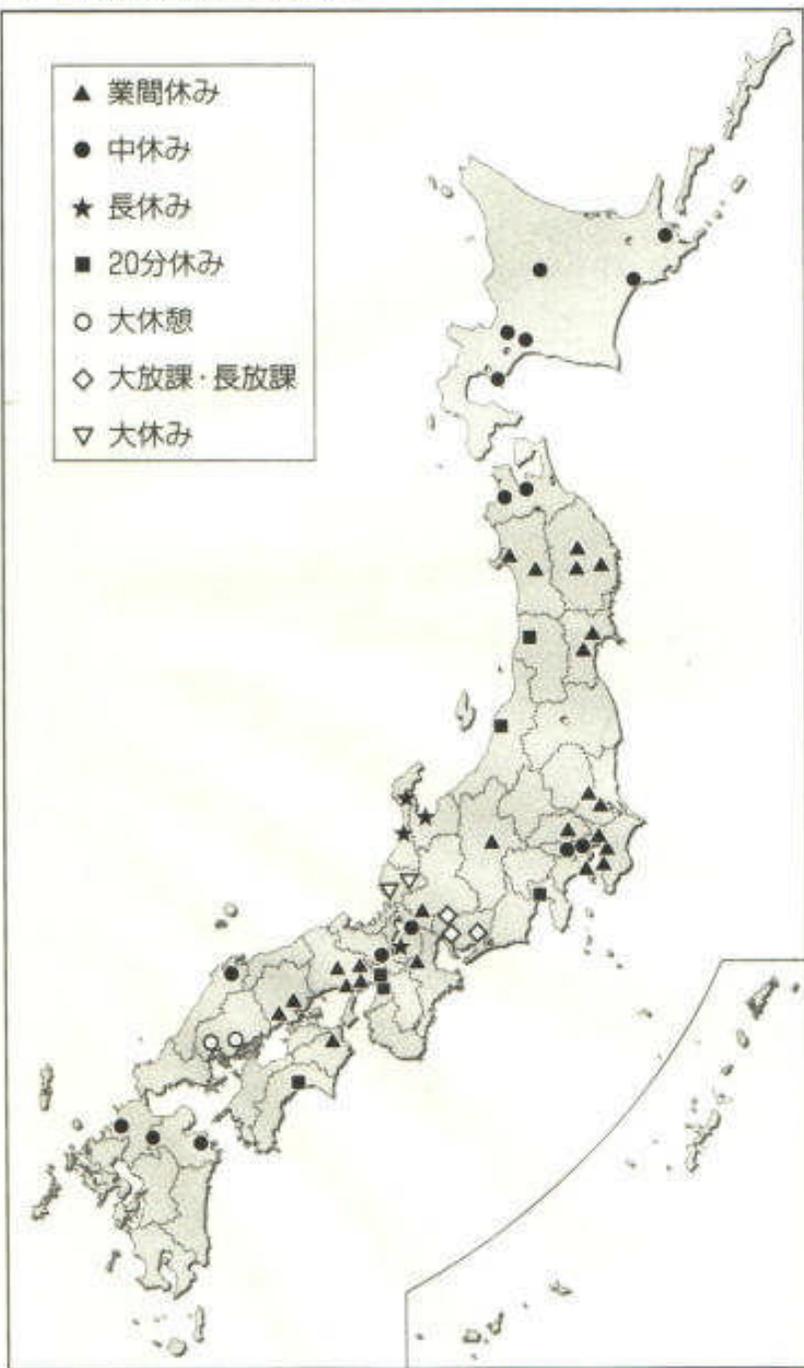
『放課後』というタイトルの東野圭吾の推理小説があるが、放課後は放課のあと、つまり休み時間のあとだから授業のことかと思いついていた生徒がいた。

地元の中日新聞が「放課」について特集した記事があるので、要点を引用する。まず、県内のおもな自治体に確認したところ、すべて「放課≡休み時間」という回答で、県教委も「一般的には休み時間のことです。」文部科学省に問い合わせると「授業と授業の間を指す言葉は決めていません。」とのこと。ただ、愛知県と境を接する静岡県湖西市、岐阜県多治見市、三重県桑名市は「放課？休み時間は休み時間でしょ」という返事、まさに愛知県だけの言葉で、私の知る限りこれを全国共通語と思っている人はかなり多い。

II 模造紙を何と呼ぶか？



III 休み時間の呼び名は？



国語辞典で『放課』を調べると、「学校で、その日の授業が終わること」とあり、休み時間という意味の記述はない。それでは休み時間を他の地方ではどう呼ぶのだろうか。

小学校では2時間目と3時間目の間の休み時間を長くとっている学校が多いが、この休み時間をどう呼んでいるのかを調べて見た。方法は、日課表を公開している全国の小学校のWEBサイトを検索し、それを調べて地図に表した。「業間休み」と呼ぶ学校が全国的に多かった。地域固有の呼び名として、広島県では「大休憩」、石川県と滋賀県大津市では「長休み」がある。

また、授業時間については、西日本では「1時限・2時限」、東日本や九州では、「1校時・2校時」と呼ぶ傾向が見られる。

さらに、小中学校の通学区域のことを、東日本では「学区」と呼ぶ地方が多いが、西日本は、近畿の一部や岡山県と広島県以外では、圧倒的に「校区」と呼ぶ地方が多い。富山、石川、福井など北陸地方に「校下」と呼ぶ地域があるが、城下などのように上下関係を連想させるというので、「校区」に言い換える地域が増えているという。

■ 学校方言に思うこと

かつては、都会で暮らす地方出身者が、方言にコンプレックスを持つことがあったが、

今では、方言がその土地の風土や人情を表す言語文化として見直されている。ただ、多くの方言は地元の人たちもそれが方言であることを自覚しており、日常会話では遣っても、方言で手紙は書かないだろうし、ましてそれを公文書に使うことはしない。

しかし、学校方言の場合、その言葉を遣っている人たちには方言という意識が低く、それを共通語と誤っていることも多い。放課や校時などの言葉は公文書でもしばしば遣われる。生徒や先生たちは、方言は年配の人たちが遣う言葉で、公共の場、教育の場である学校で遣われる言葉は共通語なのだという思い込みがあるようだ。

学校方言の使用を問題視するわけではなく、まして、文科省が基準を示して統一するべきものなどとは、もちろん思わない。基準や共通語がないからこそ、自分たちの言葉こそ正しいと錯覚したり、他地方の言葉を蔑視したり、偏見を持つことがないよう願うのだ。この項で紹介した多くの学校方言もそれぞれの地域固有の文化であり、いつまでも大切にしたいものばかりだ。